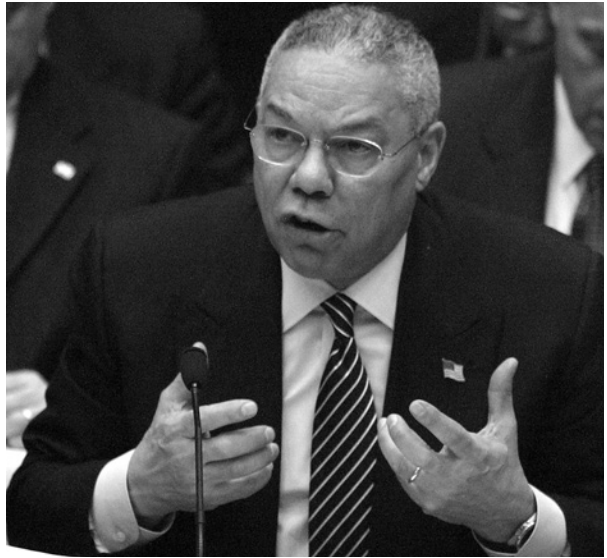


# 追悼 パウエル元米国務長官 超大国の責任と倫理を背負った 誇り高き愛国者



Colin Luther Powell  
(1937年4月5日～2021年10月18日)  
ニューヨーク市立大学シティカレッジ卒業後、  
陸軍に任官。ベトナム戦争には2度従軍した。  
1987～89年レーガン政権で国家安全保障問  
題担当大統領補佐官、89～93年ブッシュ（41  
代）政権で米軍統合参謀本部議長などを歴任  
し、93年退官、2001～05年ブッシュ（43代）  
政権で国務長官。著書に『マイ・アメリカン・ジャー  
ニー』など。

写真は2003年7月にイラク査察をめぐる国  
連総会で演説するパウエル国務長官（ロイター  
／アフロ）

## 加藤良三

元駐米大使  
かとう りょうぞう 一九六五年東  
京大学卒業、外務省入省。アジア局  
長、総合外交政策局長、外務審議官  
（政務）などを経て、二〇〇一～〇八  
年駐米大使。現在は日米文化教育交  
流会議（カルコン）日本側委員長を  
務める。著書に『日米の絆 元駐米  
大使 加藤良三回顧録』がある。

一〇月一八日コリン・パウエル元アメリカ国務長官（国

家安全保障担当大統領補佐官、米軍統合参謀本部議長など  
歴任。以下敬称略）の逝去が報じられた。本年は六月二九  
日に同じ時期に国防長官だったドナルド・ラムズフェルド  
も亡くなっており、筆者が駐米大使だった時代の大立者二  
人の逝去に感慨を禁じ得ない（ラムズフェルドについては、

本誌六八号で追悼記事を書いた）。

パウエルには、しばしば「黒人で初めての」という形容  
が付いて回る。事実として間違っているが、この表現に  
は違和感がある。彼はそれを超越した全米次元の純正「エ  
リート」だったし、彼自身、何よりアメリカの「愛国者」「良  
きアメリカ人」たることを自認していたと思う。彼から「黒

人コンプレックス」的な「陰」を感じたことはなかった。彼の家庭は、アメリカの優れた軍人によくある家族の結束が固く「普通度」の高い暖かい家庭だった。アルマ夫人は「夫と違って配偶者に過ぎない自分には何らのステータスも無いのだから」と言って、セレブ然として振る舞うことを嫌っていた。

## 対イラク開戦時、国連安保理関与に尽力

パウエルかつかくの軍歴は赫々たるものである。湾岸戦争時における彼の卓越したリーダーシップは、「アメリカは唯一の超大国」という認識を世界に行き渡らせた。パウエルは一貫して唯一普遍的な国際組織としての「正統性」を持つ国連の任務であるべき「世界の警察官」の役割を、その正統性を持たないアメリカ一国が負うことには反対だったし、武力の行使には極めて慎重だった。しかし、いったん武力介入の必要ありとの国の決断がなされた場合は、戦闘の最初のフェーズに圧倒的な兵力を投入して一気呵成、短期間に終了させ、損害を最小限に抑えるべきだという考え方を持っていた。これはヴェトナム戦争従軍の経験から彼が得た教訓である。

国務長官としてのパウエルは、世界的に人気の高い大物

長官であったが、任期中の仕事はテロとの戦い、イラク戦争という「有事」への対応に多く費やされ、「平時」の国務長官としての手腕を示す機会は限られざるを得なかった。9・11後のテロとの戦いに対する迷いは、パウエルにはなかったと思う。イラク戦争について彼には葛藤があつたはずである。

前者については「国際社会対テロリスト」という構図の下、同盟国・友好国の共感が広く得られたのに対し、後者についてはブッシュ四三代の「私怨」(サダム・フセインは「父親の命を狙った男」ということも幾度か述べている)による戦争ではないか、そもそもイラクの核保有は事実なのかという疑念が、同盟国・友好国間にも存在した。結局イラクの核保有に関するアメリカ情報機関の判断は誤りということが明らかに、この情報を基にイラクへの武力攻撃を正当化しようとした自らの国連演説を、パウエルは「人生の汚点」として終生悔いることになる。

ただ、筆者には今も9・11直後のアメリカの国民感情の昂たかぶりが目に浮かぶ。当時ブッシュ政権内では、たとえ議会の承認がなくとも武力行使すべきだという強硬論に勢いがあつた。さすがに議会の承認は得るべきだということに落ち着いて、その承認も得られた。ダニエル・イノウエ、



パウエル国務長官と筆者。2001年12月、米国務省で（筆者提供）

ヒラリー・クリントンなど民主党領袖も含めてイラク戦争への超党派の支持があった。

しかし議会の承認に加え、さらに国連安保理の武力行使容認を取り付けるべしという議論に對しては、政権内部に少なから

ざる苛立ちがあった。当時、小泉総理はブッシュに對して「アメリカは世界の最強国でその軍事力は全世界が束になつても敵わないほどであるが、『実力』すなわち『権威』ではない。大義名分を得ることが重要だ。国連に『実力』はないが、アメリカにはない『権威』がある。それを活用することによって国際社会の共感が強まる」と説いた。おそらく、この日本の立場はパウエルの立場でもあったに違

いない。

結局アメリカ政府も安保理決議を求める方向に舵を切る。しかし、国務長官パウエル必死のシャトル外交も思うようには進まない。湾岸戦争の時に取り付けられたような明快な武力行使容認決議は得られず、強力な多国籍軍も形成されるに至らなかった。しかしパウエルはこの時、日本が日本なりに一貫してパウエルを背後から支え続けたことを、よく記憶していたはずである。

## アーミテージ副長官とは「一心同体」

パウエルの対日観、対中観はどういうものだったかと聞かれることがある。率直なところ、パウエル自身にどれほどの日本文化などに対する理解や関心があったかは定かでない。ただ、この点はパウエルとリチャード・アーミテージ（副長官）との関係を抜きにしては語れない。

この二人は「盟友」をはるかに通り越した「一心同体」の間柄だった。パウエルは自分の「分身」であるアーミテージに、日本を筆頭とする「アジア太平洋」を全面的に委託（delegate）していた。アーミテージの日本に対する分析・判断は、そのままパウエル自身のそれとしてインプットされた。二人の間のコミュニケーションはまさに「不断」と

いう感じで、折々その現場を目撃する機会があったが、その密接さと会話の迫力には目を瞠<sup>みは</sup>る思いがした。

その結果として、パウエルは常に「日本重視」であり、また、自身がイラク戦争の折の日本の行動を実地に見て、確固たる「対日信頼感」を有していたという図式である。また、当時はまだ中国の存在感は今ほどではなかったが、パウエルが中国に対して「幻想」を抱いていたとは到底考えられない。

## 車いじりとスポーツを愛した童心の持ち主

パウエルには「童心」があった。彼は車好き（ブランド云々ではなく車いじり）、スポーツ好きだった。

9・11後の毛羽立った雰囲気の中、パウエルが日本大使公邸に来てくれたことがある。その時、在ワシントン日本企業代表の協力を得て、水素電池搭載の車を彼に運転させた。公邸敷地内を何周か回って車から降り立ったパウエルは、「エンジンが実に静かで加速もすごい。しかし、電池が大きいな。今は値もつかないのだろうな。いずれ小さくなったら凄いことになるのだろうな。飛行機にも積めるようになるのだろうか？」と言って上機嫌だった。

二〇〇二年二月、王貞治さんがワシントンに來られた

時、筆者はアーミテージに王さんとの会談を持ちかけたところ、二つ返事で「パウエルも会いたいと思うよ」との反応。翌日この二人との会談が実現した。

パウエルは「昨夜、もう一度貴方が七五六号を打った時のビデオを見た。フラミンゴのスイングが美しいが、世界記録のホームランを打った後、何らの派手な仕草もなしに淡々とベースを回る姿が優雅 (graceful) で感銘を受けた」とコメントした。実にいいコメントだと思った。パウエルと王さんの信条やスタイルにはお互い共鳴するところがあるのだなと感じたものである。

彼自らが言う「人生の汚点」にもかかわらず、パウエルの人生は「良きアメリカ人」で、軍の最高位を究めた伝説的な (legendary) リーダーが重要な国務を担当したケースとして、第三代アイゼンハワー大統領と重なって見える。両者の座右の銘 (モットー) もよく似ていて、例えば危急の時にこそリーダーには樂觀 (オプティミズム) に基づく決断力が必要だとする部分などは、筆者の胸にも深く響くものがある。

正に危急の時に直面していたパウエルに何がしかの「慰い」を提供できたことは、今も筆者にとって後味のいい思い出になっている。●